

平安文学における僧社会の性差

Sex difference of priest society in Heian literature

上田 ひかり

Hikari Ueda

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 言語文化学専攻 修士課程

キーワード : 出家, 僧, 尼, 生活

Key words : Bonze, Priest, Nun, Life

1. 研究目的

本研究は、平安時代における尼の生活形態から、僧尼間の性差を明らかにしていくものである。平安文学というものは、尼の文学ともいえるのではないだろうか。なぜなら『源氏物語』を中心に、尼それぞれの生活が細かに描写されているためである。

当時の尼について簡単に触れておくと、国分尼寺の衰退に伴い「家尼」という形をとっていた。また、髪型も完全剃髪ではなく、尼削ぎという肩までの長さであった。家にいながら仏道修行をしているということは、当然家族などの人間関係や日常生活での活動にも目を向けていたはずである。こうしたことから、僧と尼では同じ出家した立場であっても、描かれ方は随分と違っていると分かる。

そこで、本研究の目的は『源氏物語』を中心に尼それぞれにおける生活形態の用例を調査し、彼女達が過ごしていった生活の実態から僧尼間の性差を明らかにしていく。

2. 研究実施内容

研究を進めるにあたっては『源氏物語』の他に、文学作品からは『栄花物語』古記録からは『御堂関白記』『小右記』などと比較していった。ただし、古記録に関しては、誰かの妻や叔母などの親戚が出家したという事実を淡々と述べているに過ぎなかった。『栄花物語』に関しては、皇族の出家を中心に描かれていた。

本研究の要である『源氏物語』からの用例は「若紫」巻～「夢浮橋」巻と多岐にわたる。人物は女性に限っても、皇族や女房など身分の上下を問わない。しかし、生活形態に目を向けると、記述の

量にムラが見られる。

具体的に挙げると、藤壺・女三宮・浮舟は出家願望からその儀式に始まっている。そして生活も仏道修行のみならず、娯楽や子供の世話、裁縫などの家事に勤しむ様子が伺える。藤壺は、後に政権を執ることになる冷泉帝や、その後見人である光源氏の行く末に関して死を迎えるまで気にかけている。このことから、彼女に関しては子供を心配しているとはいえ、世の中全体に視点を向けている。浮舟に関しては、消極的ではあるが、横川の僧都の母尼・妹尼といった他の尼達との交流もある。一見すると皇族と関係が深い人物は出家儀式を描くように思われる。しかし、浮舟においては関係が深いとはいえない。加えて、六条御息所については儀式に触れられておらず、娘の秋好中宮を心配する描写しかない。

子供の世話に限れば、後に紫の上と呼ばれる若紫の祖母や明石の尼君、そして葵の上・頭中将の母親に当たる大宮が挙げられる。この二人に共通しているものは、登場から一貫して自身の子供や孫といった血縁関係の深い人物を気にかけていることである。また、血縁関係ではないが、女房として薫と接する弁の尼も忘れてはならない。彼の結婚の仲立ちを積極的に引き受け、わざわざ化粧までして外出する。この描写は「家尼」という存在意義を考えるにあたっては大変興味深いものである。

その他では、古記録の記述ほどではないが、空蟬・源典侍・朝顔の斎院・朧月夜の君に関しては出家をしたことと、その後の様子が少しばかり描かれているのみであった。

以上が現段階の『源氏物語』における用例である。先述した通り、立場的にはある程度恵まれた

人物ということは共通しているが、それでも記述のムラには疑問を抱くべきである。なぜムラが生じるのかというと、出家願望の強さや、関わる人物が親しい間柄によるのではないかと考える。藤壺・女三宮・浮舟は出家の意志を強く表し、尚且つ関わる人物も多い。逆に、空蟬・源典侍・朝顔の齋院・朧月夜の君は、関わる人物が少なく、出家の意志を表している記述も少ない。これらのことから「家尼」と呼ばれた彼女達は、尼寺がないからこそ行動範囲も広く、自由も守られていたといえる。尼生活というのは、守られた自由の範囲内で家事や子供の世話、娯楽に打ち込んでいたのである。

3. まとめと今後の課題

現段階での到達地点としては、尼の生活形態の描かれようは、生活の中で関わっていく人物とどれだけ親しいかによるのではないかと考える。また、目を向ける範囲が身内の中に留まっているか、もしくは世間に向けられているかによっても描かれ方が違ってくるのではないだろうか。また、国分尼寺の衰退があったからこそ、家や外でどのように過ごすかはその人次第で決まってくるともいえる。

今後の研究課題としては、引き続き『栄花物語』を中心とした文学作品と、当時の仏教観を比較して新たな見解を得られるよう進めていきたい。